

楽しく生きる



宮崎県

黒木クニ子

私たち人間、それから動物たちも、皆幸せな暮しができるような社会でありたいものですね。私は身体障害者です。けれども、今は、とても幸せな気持ちで毎日を送っています。

三十数年も前のこと、突然手足の関節に痛みを覚え、医院へ行ったところ、先生は「急性リウマチだから治る」と言われました。しかしその後発熱と痛みを繰り返し、薬を飲んでも注射をしても痛みが治まりませんでした。手も足も腫れて、それは痛さと疼きで夜も眠れず、朝まで起きていることもありましたが、あちこちと、病院へも行きました。長い間苦しみました。でも今では、薬もよい薬がで

きましたので、以前のような激痛も抑えられるほどです。

そうこうするうち、主人が病氣になり、今度は私が看病しなくてはなりませんでした。主人の病名は「肺気腫」でした。

とても息が苦しい病氣で、見ていても可哀想な時も多々ありました。そのうえ今度は脳出血で倒れ、意識不明の状態が三日間続き、先生の話によると「生死は半分半分」と言われました。だけど、私は生きる方にかかけました。人間そう簡単に死んでたまるものかと、願いも兼ねて祈っていました。

幸い、何とか命は取り留めたものの、半身が不自由になりました。けれど皆で「良かった良かった」と喜び合いました。おかげで私は自分の病氣のことも忘れがちになるくらいでした。

というのも、最近だんだんと薬も良い薬ができましたので、飲み忘れをしなければ痛みを抑えられるようになったのです。

「神様は私たちを見放さなかったのね」

と、しみじみと思いました。もう大丈夫、今度は私が主人を元気にしてやろうと思い、朝から夜まで杖をつきながらでも、看病は苦になりませんでした。ところがとうとう主人の病氣が重くなり入院することになりました。まあ病院なので一安心だと、私もほっとしましたところ、今度は一人で暮らしていた実母のことで隣近所に迷惑をかけるようになりました。認知症です。

困ったものだと思いますが、幸い、私は自由な身になっていましたので、私が母の家に行き、一

緒に暮らすことになりました。

ところが、なかなか難しいものですね。覚悟はしていたものの、完全な認知症までは進んでいないものですから、私に

「何しに来たのか？ お前の面倒を見てもらおうと思つて来たのだろうが、帰れ！」と怒鳴ったりして…。

私の手足の指が變形しているものですから、近所の人たちに私の体の状態の悪口を言つて聞かせていたのだそうです。廻りまわつて私の耳に入れてくださるのですが、私はいつものことだと思ひ笑いながら聞いていました。

母は若い時から農家の嫁として働いてきましたので、いまでも力はまだまだ私より強いのです。あの朝のこと、派出所から電話がありました。

「お宅のおばあちゃんはおられますか？」

「はい、寝てますけど」

と言いますと、

「今こちらにおられますよ」

と言われたので、寝室に行つてみますと、なんともぬけの殻でした。裏の方から出て行つたのでしよう。話を聞いてみると、自宅から約二十キロ位のところまで歩いて行つていたそうです。自転

車で通りかかった男性が、変だと思って警察へ通報して下さり、パトカーに乗ったものの、管轄が違ったのか、二度も車を乗り換えたそうです。

母の着衣には、住所・氏名を書いていましたが、よくも無事に保護して下さいました。

私は派出所に着いた途端、今までの緊張とイライラとしてたものが、すーっと抜けるようでした。

母を見ると若いお巡りさん相手にニコニコ笑いながら話しており、迷惑をかけたことなどなんのそのです。息子と私はお巡りさんにお詫びとお礼を言つて帰りました。

母にいきさつを聞いてみると、ただ、

「車に二回乗った」

と言うのみでした。

あとはよほどお巡りさんたちの親切さがうれしかったとみえ、ニコニコしています。ヤレヤレひと段落だねと、息子と顔を見合わせほつとしました。

今度は妄想が起こり始めました。

八十五歳を過ぎ、まだ自転車に乗るのだと言つて聞きません。止めるのも聞かず、自転車を持ち出し、押していきますが、途中で座りこんでは迎えに行く始末です。それでもまた、朝になるとどこかへと出かけ、他人の畑の草取りをします。

「そこは家の畑ではないよ」

と言うつと、

「おまえは知らんのだ。自分が買った畑だ」

と言つて聞きません。また

「だれだれさんが自分の土地に家を建てている」

と言つて、その人の家に行つて抗議するのだと言います。何とか治まる時は良いのですが、また思い出すのか、母の言葉に従つて、あつちこつちと連れまわされ現場に行きます。納得させようとするのですけれど、家に帰つてしばらくするとまた繰り返しです。二年間位そのような騒動が続いたでしょうか、だんだん認知症も進んで、昼夜が分からないようになりました。夜眠れないのか何回も起きてきてたり、時には十二時ごろ起きてきて、

「ご飯はまだか」

と大声を出します。私が

「今は夜中だからまだ寝る時間だよ」

と言つと、すぐすごと寝床に行きます。朝起きる時間も自分の都合で、朝五時前から起きてしばらくはテレビを見ていますが、大声が出ます。

「ご飯はまだか」

私も意地悪で

「まだ早いよ」

と言い返します。親子漫才みたいです。また夕刻日も暮れ、夕食も終わり、二人でテレビを見てみると、

「買い物に行ってくる」

と言う。

「もう食べたから行かなくていいよ」

と私が言う。

食べ物は肉が大好きで、野菜は嫌いです。なんとかバランスを考え、煮込み料理で食べさせようとしては、お皿には野菜だけが残っています。かかりつけのお医者さんも、「もう、九十五歳にもなつて元気だから、好きなものを食べさせなさい」と言われるのです。

とにかく元気です。言い争いになることがあります。結局私が負けます。力も強いし、言葉も出る。私は呆気あっけにとられ、ポカーンと二の句が出ない有様です。言いたいことを言いながら暮らしておられます。

介護保険施設（デイサービス）へ、月曜日から土曜日までお世話になることになりました。よかつたことに、これまで週二日ほど近くの温泉へ行っていたので、「温泉へ行こう」と言うと、喜んでいきます。そうこうするうちに施設にも慣れてきたのでしよう。朝、迎えのバスが来るのを楽しみにし

て外に出て待つようになりました。待ち時間が長い時など、バス停まで行くのだと言い、出かけるようにしますので、なんとかなだめると待っています。施設の皆さんとも楽しく過ごすごうができるようになったのでしよう。毎日頑張つて行っています。

施設から帰ってきて、今日は何があったのか尋ねてみても、何も話してくれません。全部忘れてしまっているのです。介護員さんの話によると、施設ではよく話をするようです。決まって昔の若いころの話で、「実は私は夫が戦死して二十三歳のころから一人で頑張つてきたのだ」と、毎日のように続くのだそうです。介護員さんたちは素直に聞いて下さるのでしよう。ありがたいことです。おかげさまで私は、大助かりです。

ほっとした気持ちでおりました。気の緩みでしょうか、貧血を起こしたり、意識をなくして倒れたり、体重もどんどん減ってきました。よくよく思い返してみますと、いつも母の愚痴を聞き流していたつもりですが、いつのまにかストレスがたまっていたのでしよう。主人も退院して、家には三人で暮らすことになり、主人はほとんど寝たきりの状態で、なんとか週二日はデイケアに行くようになりましたけれど、毎日私は朝から夜まで看病です。私は股関節の痛みで杖をつけて、歩くのもやっと。痛い痛いと言いながら二人の世話をしていました。私が頑張らないといけないと自分に言い聞かせ、時には主人に愚痴をこぼしたりしながら……。すると主人は何も言わず笑って聞き流してくれました。苦しい中にもまだ二人の役にたつてるといふ事は何よりも私の心の支えでもありました。食欲のない

主人へ、少しでも栄養のあるものを食べさせてあげたい、少量でもおいしいものをもとっては作る楽しみもありました。自宅で酸素吸入をしていましたが、体調が思わしくなくなり、入院することになりました。

家には認知症の母とまた二人になりました。ますます目が離せません。朝の支度をし、洗濯物を干していたのですが、足を一歩ずらしたところ、板の継ぎ目に足が引っ掛かり、ベランダから庭の砂利の上にあおむけに落ちてしまいました。まずレンガの上に頭が激しく落ちたので、頭が割れたような痛みでしたが、次に背中の痛みで起き上がれませんでした。母の起きてくるのを待つしかないかと、そのままじっと寝ていると母が起きてきました。私を見て、「何をしとる」と言うので、「落ちて動けんから、息子に電話して」と言うと、その時正気に戻ったのでしよう、すぐに息子が飛んできました。息子が私を何とかベッドに運んでくれ、すぐに救急車の手配をしてくれました。私は母のデイサービスのところへ連絡を取り、母を預かってもらうようお願いしましたところ、急なお願いであったにもかかわらず承諾していただき、天の助けと喜びました。

そうこうするうち、救急車の方も来て下さり、着の身着のまま救急病院へ直行しました。病院へ着くと、先生方が待っていて下さり、テキパキと診察が行われ、頭の骨は異常なし、けれども背骨が圧迫骨折とのことでした。レントゲンに写った股関節と骨盤のずれがひどく変形しているのを見てびっくりしました。今まで外面からは何も見えてないものですから、ただ痛い痛いと言っていたのですけ

れど、ぞつとしてしまい、早速手術をお願いしました。先生も承知して下さい、まず、背骨の骨折の治療から始められました。

「リハビリです」と言われ、痛いけれども、「我慢して下さい」と言われ、「はい」とは言ったものの、本当に痛い時が時々ありました。そんな時、恥ずかしさも忘れ、歯をくいしばってうずくまり、先生にも迷惑をおかけしましたけれど、日に日に痛みも楽になり、「手術も、もう大丈夫ですよ」と言われるようになったところ、若い先生が私に、「僕が手術をさせてもらいますよ」と言われ、私は先生を見て、若いなあ頼りないなあ、と思っていました。それからの手術の日取りも決まり、ある日のこと、手術の説明書を手渡されました。

先生は私にこうおっしゃいました。

「僕は絶対に同じ手術を繰り返すようなことはしません」と。その言葉を聞いて、心の底から信用しました。

まず血液は自分のものがよいので、手術時の輸血用に、私自身の採血が行われました。二日に分けて四〇〇ccずつ採るのに、一日目は、他の先生が行われ、一時間あまりかかりました。次の日もまた一時間以上かなあと思っていました。やってこられた先生は、私の手術の担当の先生でした。すると始められてから三〇分も経たないうちにすんでしまいました。ますます先生を信用してしまいました。人は見かけで判断するものではないと、自分に言い聞かせ、それから、手術の日も安心して迎え

られました。人間の心に訴える一言の大切さが身にしみる思いでした。手術も無事終わり、意識も回復し、先生にお礼を言うと、先生は、

「貴女こそ頑張りましたね」

と逆に私を褒めて下さいました。その後は、痛い痛い先生に愚痴を言いながらも、リハビリに精を出しました。それでも先生は、優しく強く頑張れ頑張れと、一所懸命励まして下さいました。

時折先生に入院中の主人のことも話をしました。これから先のことを教えてもらい、お互い元気になつて帰るのだと、もう少しだと思っていました。

ところが、突然主人の入院している病院から電話がありました。息子から、「お父さんが死んだ」という知らせでした。私は手術をしたばかりでどうすることもできません。葬儀も出さなくてはなりません。早速先生に相談しましたが、「外泊は一泊だけ」と言われました。それもそのはずです。私自身も歩行器にもたれながら、やっと歩けるくらいになったばかりです。一泊でも帰れることはありません。帰ってみると、床の間に主人の変わり果てた姿がありました。でも顔を見ると穏やかで、安らかに眠っているようでした。入院していた三か月の間、私は一度も主人の見舞いにも行けません。でも元気になつて帰つてこれると思つていましたので、その日を楽しみに待つていたので、けれど、悔いても仕方のないことです。どうぞ許して下さいと謝るだけでした。一晩仮通夜をして、明くる日私は病院へ帰り、病室でお祈りをさせていただきました。あの世へ旅立った主人に何とお詫

びを言ったらいいのでしよう。「今更もう遅いよ」と笑って言ってくれるのでしょうか？ 息子たちは仕方のなかったことだと言ってくれます。葬儀のことや、後始末のこと、何もかも息子たちがやってくれました。ただ私は自分の回復を待つばかりです。早く元気になってお礼を言おうと思いましたが人間は強いものですね。私も今では元気になり、何とか杖をついて歩くことができるようになりました。「良かったね！」と喜んで、母も施設から家に連れて帰り、今度は二人で暮らすことになりました。何も分からない母は、主人は病院へ行っているものと思っています。時々尋ねますが、本当のことを教えても、「病院へ行っているのか？」と繰り返し言います。

それからまた、いつもの親子戦争がはじまります。「朝よ。おはよう」と声をかけても知らんぷり。最近、特に朝起こすのが大変です。目は開いているのに返事をしません。「ご飯よ。一緒に食べよう」と言っても返事は無し。繰り返し同じことを言います。今度は、「食べたくない」と返事があります。うかつに準備が遅いと、そうつと出てきて、母の好きなものだけを、黙々と食べ始めます。やがて、介護員さんが来られる時間なのですが、食べ終わると、「もう寝る」と言い、また寝てしまいます。私は何を言おうと、お構いなし。結局、介護員さんをお願いするしかありません。すると、「どこ行くの。あははは」とか笑いながら起きて来るので、そのまま連れて行ってもらいます。「介護員さんありがとうございます」と言いつつ、それからもひと仕事です。

まず、トイレを見ます。必ずと言っていいほど汚しています。何もかも洗濯しなくてはなりません。

時々尿もれパッドを便器の中に入れ込むようになり、たまに私が注意をしますと、顔色を変えて、自分ではないと言い張ります。注意をされることは、自分をばかにしたと言わんばかりの言い返し方をするので。でも、この調子ならまだ大丈夫だ、喧嘩けんかも時には刺激になっていいのかも知れないと思うのです。

ところが、しばらく経った日の夜、八時ころだったでしょうか。何かバーベキューのような焦げるような臭いがするけど、お隣さんが焼き肉をしているのだらうと思いい床につき、そのまま朝が来ました。朝起きて、ガスコンロの火がつかみません。どうしたんだらうとヤカンを開けてみると、何と空っぽです。びっくりして息子に電話をすると、すぐ来てくれて、ガスボンベを見に行き、「スイッチをリセットすれば良いかも。でも、ガス屋さんに電話して」と言うので、ガス屋さんに来てもらいました。すぐに直りましたが、またまた反省です。人を責めるより自分自身の不注意だった事をまた一つ覚えました。その後同じ失敗はまだありません。

その後は、まあなんとか平穏な日々が続き落ち着きかけたころの夜、今夜は寒いので早く休もうとひと眠りしたころ、何か音がしたので、耳を澄ましていました。しばらくすると静かになったので大丈夫だと思い、私も床につきました。

翌朝はとても寒く、昨夜のことが気になったので、まず母のところへ行ってみると、母はベッドに寝ていますが、ガラス戸が開いていて、部屋の中の空気は冷え冷えとしています。また、部屋のあち

らこちらに土が上がっています。夜中に素足で外に出たようです。母は起き上がり、ベッドを離れようとしたり途端、ドスンと畳に尻もちをついてしまいました。体が冷えて、足もかなわなかったでしょう、起き上がれないようです。何とかトイレだけは済ませましたが、私一人ではどうにもならず、息子の嫁に電話すると、運よくまだ家に居たので、早速病院へ連れて行ってもらいました。

老いた母を責めるわけではありませんが、何かと大変なことが多いのです。今度は私の体調がおかしくなりました。貧血は待ったなしで、ちよつとした動作で息切れし、横にならないと呼吸もできないほどの有様です。

思い切って胃の検査をしてもらおうと思いい病院へ行きました。検査結果は、「即入院だ。あなたの体の中には、血液の量が普通の人の半分しかない」と言われ、そのまま入院して輸血を二日、食事の代わりに、必要な栄養素を点滴で摂ると、みるみる血の気が差してきて、手足の指の色までピンク色になりました。原因は胃潰瘍いはいようでした。写真説明をして下さいましたが、胃の中の奥の方は穴が空いている様に見え、その周りは、できものみたいな黒っぽいキノコのようなようでした。でも、先生は、「治りますよ」と言ってお下さいましたので、完治するのを楽しみに入院生活を送りました。先生は「もっと早く病院に来るのですよ」と言われました。何年も前から出血していたのです。どんな病気でも早めに治療をする方がよいことは分かっていましたけれど、なかなかそうはいかないものです。

体調も良くなり、「さあ、これから頑張るぞ」と自分に言い聞かせて目標をたて、一日の計画表を

壁に貼ってみました。すると、昔の親友達が久しぶりに訪ねて来てくれ、懐かしさがこみあげ、泣いたり、笑ったり、時間の経つのも忘れて話し込んで、何と五時間も経っていました。「あらあら、お茶も出さずに、淹れてくるわね」と言うと、友達は、「お茶よりもせつかく会えたのだから、まだまだ話し足りないよ」と言い、話が尽きませんでした。

そのようなことで、物事は計画通りにはいかないものだという事も分かりました。でも楽しかったです。友達と過ごした数時間は、私の心に栄養をたくさん与えてもらいました。友人が帰り一人になっても、まだ私の心や記憶に残る、子供の頃遊んだ、花ちゃん、八重ちゃん、文ちゃんが次から次に話しかけてくれるようでした。そして私もいつしか、花ちゃん達と遊んでいる気持ちでうきうきしていたのです。ありがとう。

また、別の友人の一人がやってきて、身の不自由な私に、「旅行に行くよ」と言います。私がきょとんとしていると、自分が背負って連れて行くのだと言います。本当に涙がこぼれました。でも残念なことに、私はありがたいけどそれは出来ない（認知症の母を一人置いては何処へも行けないので）のだと、説明すると、友人も涙を流して悔しがってくれました。またも、私はうれしさのあまり泣いてしまいました。最近は何年をとって涙もろくなったのでしょうか、涙腺が緩んでいるようです。

うれしいことは数えればきりがありません。また、私がデイケアから帰ってみると、今朝まで藪状態だった庭がよその庭のようにきれいになっていました。誰がこんなに立派にして下さったのかなあ。

今度は、中学生時の男友達が見るに見かねてきれいにしてくれたのでした。思いもよらぬありがたい援助に感謝の気持ちでまた涙です。人の情が身にしみるこの頃です。私は、今本当に幸せです。これからもまだまだ頑張るつもりです。皆さんありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

黒木クニ子

昭和十二年生まれ 無職 宮崎県宮崎市在住

【受賞のことば】

何の取柄もなく、ただ毎日を慌しく送り、心のゆとりもなく無我夢中の暮らしでした。今やつと反省すると同時に、人への思いやりの気持ち等ようやく解りかけてきたようです。ある日、ふと耳にしたお話が、「悔いの無い一生を送ろう。心を苦しめることをせず、心を楽にすること」でした。私は、ハッと思い当たるものを覚え、「心」を書いてみようと思ひ、応募しました。おかげさまで、心を楽にすることができました。

選評

なぜ、こんなに不幸な出来ごとが黒木さんにつきつきと重なってくるのだらうと思う。だというのに黒木さんは今は、とても幸せな気持ちで毎日を過ごしているとおっしゃる。なぜだろうか。ご本人はリウマチの痛みに耐えながらご主人の肺気腫の看病、お母さんの認知症への対応と相次いでおしよせる重荷にもおしひしがれない。だが、庭の清掃を友達がしてくれるなどうれしいことは数えきれない。感謝のうちにまだまだがんばるといふ黒木さんに「まねびたい」ものである。

(江草 安彦)